

BATTLE BALLER

HARUKA

I—3

フェニックス心拳

(不死鳥)

Ψ

バトルボーラーはるか

一集

バトルボール(神気珠玉)

第三章

フェニックス(不死鳥)心拳

口をぽっかり空け、はるかを見つめたまま固まっている沙織。目だけを動かし、周りを見回すと、黒こげとなったダンシングベイビーの残骸が、そこかしこに無数に転がっている。

「ぬうう。貴様、何をしたーッ。」

「ハサミを全て打ち返したのよ。」

「打ち返した！？そんな馬鹿なッ。」

その言葉は、焼け焦げたような状態で転がっている、ダンシングベイビー達を見つめている沙織の耳にも届いていた。

確かにそれらの人形達には、ハサミが突き刺さっており、あの竜巻のような凄まじい風は、人間業とは思えない動きで、激しい人形の攻撃を跳ね返したものだとも考えられる。しかし、黒こげとなったそれらの残骸についてまでは説明が着かない。

「さあ、もう逃げられないわよ。出てらっしゃいッ！」

「もう勝った気でいるつもりかッ！」

「降参(こうさん)しない気？」

闇に紛(まぎ)れて身を隠すジャン・ピエールには、まだ何か秘策(ひさく)があるのだろうか。自信満々(じしんまんまん)に、はるかの勧告(かんこく)を突き返した。

「一つ言い忘れたけど、さっき打ち返したハサミって、まだそこらへんを飛んでるのよね。」

「何ッ！？」

「ドコだと思う？」

「まっ、まさか！！」

ヒュッ。

空を切り裂く音に、ジャン・ピエールが後ろを振り返る、しかーし！時すでに遅ーしッ！！ハサミは目前まで迫っていたッ。

「ぬおおおおお貴様あーッ。」

グサッ。

ハサミがジャン・ピエールを掠(かす)めたッ。

「ぐぎやあああーッ!？」

ダルシムのヨガフレイムに焼かれたようになり、悲鳴を上げるジャン・ピエール。全身を炎が包んだーッ!! 倒れ込むジャン・ピエール。炎は一瞬で消えたものの、相当のダメージを負ったようだ。

「うぬおおお・・・!!」

「降参しなさいッ!!」

ジャン・ピエールを掠めたハサミが、沙織の手前まで来ると失速して落ちた。そのハサミは焼き入れをされたかのように、真っ赤であった。よろめきながら立ち上がろうとする、ジャン・ピエール。

「ぬぐうおおおーッ!!」

「まだヤル気!? あなたに勝ち目はないわ。ヤメときなさいッ!!」

「まさか貴様が、あの伝説のフェニックス(不死鳥)心拳の使い手だったとはな。」

「・・・・。」

「古代ユダヤ民族の秘中の秘と言われた、究極の暗殺拳の使い手が、まさかこんな小娘だったとはな。」

「私の拳は暗殺拳なんかじゃないわッ!!」

「この八万町の地が、古代ユダヤ継承(けいしょう)の地だったというのは本当だったんだな。」

「あなたはソロモン王の秘宝が目的なの？」

「フフフ...少し違うな。」

「他に何が・・・」

「黒魔術を極めた俺様にとって宝など何の興味もない。」

「じゃあ何故ッ？」

「人間の力を超えた存在を求めておるのだよ。俺様はな。」

「まさか・・・あなた!？」

「そうだ。俺様の求めているのは、黒魔術の神。ルシファー様の復活だ。秘宝ある所に必ず現れると言われる伝説の大悪魔。その力を俺様が手に入れば、秘宝どころか世界征服も夢ではない。」

「そんな・・・」

「俺様に力をお与え下さった魔王様にお礼をさせて貰うのだよ！！そして、より強い力を授けてもらうのよ。」

「そんなコトさせないわッ。」

「機は熟(じゆく)した。」

長いやりとりは、時間稼ぎの為の物であった。肩口からの出血を、庇(かば)っていたかのように見えたジャン・ピエールだったが、実は掌(てのひら)に血を溜(た)めていたのであった。そして、その手に付いた血を地面へと滴(したた)らせていたのである。

はるかが地面をよく見ると、暗くて判らないでいた魔法陣が、ジャンの血に反応するかのよう、蒼白い光を放ち出した。それはとても巨大な物であった。

「見よ、この力を！！！」

激しい地響き。それと共に、地中からおびただしい数のおどろおどろした形の物体が影を現した。

「これはッ！？」

「オレ様を一瞬黒こげにしたからって、いい気になってたようだが。トドメを刺さなかったのが失敗だったな。」

無数の影が蒼白く光りだし姿を現したッ。な、なんと、それはハリボテで作られた人形であった。

「秘儀(ひぎ)、日本妖怪大全**10**傑(けつ)！！！」

水木しげるの絵をモチーフにしたのか、懐かしのあのキャラクター達もふんだんに盛り込まれたハリボテ製の人形達。中に人でも入っているかのように、それらは生氣(せいき)を帯(お)び、ジリジリとはるかに迫る。

「かかれッ！！」

ジャン・ピエールが声を掛けると、一斉に妖怪達が襲いかかってきた。俊敏(しゅんびん)な猫又(ねこまた)が素早く飛び跳(は)ね、鋭(すど)い爪を突き立てようとするッ。間一髪(かんいっぱつ)かわしたはるかだが、すかさず砂を手にしたババアっぽいのが砂を投げかけてきたーッ！！

「くっ！！」

一瞬だが視界を遮(さえぎ)られたはるか。その死角(しかく)から、ネズミっぽい格好の男が、はるか目掛けて飛びかかるッ。すんでの所で深手(ふかで)は免(まぬが)れたが、そこに今度は氷柱を持った雪おんなが、はるかの背後から斬りかかってきた一っ！！

「危ないッ!?はるか!!」

「キャッ！」

振り向き様に目にした氷柱に、思わず出たはるかの悲鳴(ひめい)。

(もう間に合わない・・・)

沙織は、その後の凄惨(せいさん)な場面が思い浮かび、失神(しっしん)しそうな戦慄(せんりつ)に全身を硬直(こうちよく)させていた。

ガシャーン

「いやあああーッ！！」

親友を想いやる気持ちが、金縛(かなしば)り状態を叫び声と共に振り払った。慌(あわ)てて駆け寄ろうとする沙織。

「沙織、来ちゃダメ！」

「はるか！！」

「私は大丈夫だから。とにかく離れて！！」

雪おんなの一撃は、はるかの心臓を確かに捉(とら)えていたが。ギリギリの所で、はるかは手にしていた真紅(しんく)のトンファーで切(き)っ先を逸(そ)らせていた。

雪おんなと揉(も)み合いながらも、押し返し、すかさず反撃(はんげき)に移ろうとしたが、ネズミっぽい格好の男や他の妖怪達がそれを阻(はば)む。さっき倒したダンシングベイビー達とは違い、長距離と短距離の武器を用いた連携攻撃(れんけいこうげき)はかなりやっかいなようで、ターゲットを絞り込む事ができず、後手(ごて)に回りだしたはるか。その攻撃は次第に厚みを増してゆく。精一杯(せいいっぱい)の抵抗も空(むな)しく、妖怪達はついにはるかを完全に取り囲んでしまった。

「どうだ！！もう逃げ回れんぞ。」

「...。」

勝ち誇(ほこ)るジャン・ピエールに、はるかは跪(ひざまず)き俯(うつむ)いたまま黙(もく)りこんでいる。いや、黙(もく)りこんでいるというよりは、八方塞(はっぽうふさ)がりの状況が身動きや言動を許さないほどに切迫(せっぱく)しているがゆえに、そうせざるを得なくなっているのかもしれないが、真意(しんい)のほどは沙織には判(は)らずにいた。

「おい、聞(き)いているのか小娘(こむすめ)！！恐怖(きょうふ)で何も言(い)えないのか？オレ様の女(むすめ)になるというのであれば、許(ゆる)してやらんでもナイぞ。」

言(い)いたい放題のピエール。そんな中、髪(かみ)に隠(かく)れてそこだけしか見る事(こと)のできない、はるかの口元(くちもと)が緩(ゆる)んだ。

「何をニヤけている。頭(かぶ)でも狂(くる)ったのか？」

「フフフ...。」

「何が可笑(可笑)しいッ！」

「そんな技(わざ)じゃ私(わたし)は倒(た)せないわ。」

「貴様(きさま)、自分(自分)が、今(いま)どんな状況(じょうきょう)に置(お)かれているのか分(わ)かっているのか？」

「ハハハハ...」

「うぬう～馬鹿(ばか)にしやがって。女(むすめ)だからって容赦(ようしゃ)はせんぞ！！」

「やってごらんなさいよ。でも、もうあなたの手下(てしよ)は、私(わたし)に指(ゆび)一本(いっぽん)触(ふ)れられないんだから。」

「ハツタリを言(い)うな！！」

「ハツタリじゃないモン。あなた(あなた)の黒魔術(くろまじゆ)の種(たね)は見切(みき)ったわ！！」

「何ッ！？」

「自分の念動力(ねんどうりよく)を魔方阵(まほうじん)を使って増幅(ぞうふく)し、人形達(にんぎょうたち)を操(あやつ)る事で具現化(ぐげんか)する。魔方阵(まほうじん)は複雑(ふくざ)で大(お)がかりな物(もの)ほど効力(きりき)を発生(はっせい)させる。そうでしょ？」

「ふん、よく見抜(みぬ)いたな。だがそれが分(わ)かった所で、貴様(きさま)の命(いのち)が俺様(おれさま)の手中(しゅちゆう)にある事(こと)に変わ(か)りはナイぞ！！」

「そんな力(ちから)じゃ私(わたし)は倒(た)せないわ！！」

「何(なに)だとッ！？」

「メキド（内力）は十分に練れたわ。証明してあげる。」

「こっ、これは??」

静かに立ち上がったはるか。ピエールを見据(みす)えた瞳が真紅に染まり、額(ひたい)には三叉(みつまた)のような形をした絵文字が、これまた真紅に浮かびあがっているッ！！そして全身から漲(みなぎ)るオーラのような物が体から溢(あふ)れ出すと、地までも揺るがし、周囲の空気をも巻きこんでいた。はるかのいる地点にだけ、まるで高密度(こうみつど)の高気圧が生み出され、陽炎(かげろう)が沸いているかのような大気の躍動(やくどう)。

「うあっ・・・おおああ・・・」

威圧感(いあつかん)に当てられたピエールが、今度は逆に金縛りに掛かっていた。

「あなたの力を増幅させた魔方陣は、言葉で描かれた円陣(えんじん)。要するにそれは、言葉の持つ力を円にまとめた物。」

「うおおお...あああ...」

必至(ひっし)に金縛りを解こうとするピエール。はるかの周りを覆(おお)っているオーラが、瞳の色と同じ真紅に染まり、炎のようにゆらめき出した一ツ！！そしてその炎は、何かを生み出そうとしているかのように鳴動(めいどう)している！！！！圧縮された大気の蠢(うごめ)きが業火(ごうか)の燃えたぎる轟音(ごうおん)となり、その鳴動から鳥を形取ったような影が生まれたああ一ツ。それは正に不死鳥といった、莊嚴(そうごん)なる紅蓮(ぐれん)の炎をまとう、神が遣(つか)わした鳥と言った風格(ふうかく)を漂わせているッ！

「おおおっ・・・あああ・・・!!」

「見せてあげる。これが私の力、内気功と外気功の力を言葉によって組み合わせ放つ神技。フェニックス心拳よ！！」

追い詰められたジャン・ピエールは、必至の思いで恐怖を振り払い、はるかへと牙を剥(む)いた

。「うおお一ツ。やってやるぞ！！かかれ一ツ!!!」

ジャン・ピエールの動揺(どうよう)に、さっきまで止まっていた妖怪達が再び士気(しき)を取り戻し、一斉に攻撃を開始した一ツ！！

「ファイヤービュート(火焰鞭)！！」

はるかの手にあったトンファーが、燃えたぎるムチに変形した一ツ！？そしてそれを目にも止まらぬ早さで振り回すと、流星の如(ごと)き閃光(せんこう)が駆けめぐり、一瞬にして妖怪達は、はるかに仕掛けようとした飛び道具ごと薙(な)ぎ払われた一ツ！！

ギシャー×10...

「ばっ、馬鹿な!?!」

いとも簡単にほどかれた包囲(ほうい)。怯(ひる)むジャン・ピエールに、すかさずはるかは次の攻撃体勢に入った一ツ。

「灼(や)き尽(つく)す!!!」

胸の辺りまで上げた、はるかの手の手平から水晶玉のような物が現れた一ツ。それは見る間にバレーボール大の球体に膨張(ぼうちよう)し、側面が激しく燃えているツ。まるで小さな太陽が、はるかの手の手平に生まれたかのような一ツ！！

「ぬうー。やられてたまるか一ツ！！かかれ一ツ。」

四散した妖怪達と共に、ジャン・ピエールがはるか目掛けて突っ込んでくる。はるかのただならぬ雰囲気を感じ、攻撃を阻(はば)もうと自らも隠していたナイフを手に特攻を試(こころ)みたのだが—

「ぬりやあああー。」

走りながら思わず叫んだ声色(こわいろ)は、恐怖を振り払おうとした物なのだろうか、悲鳴のようにも聞こえる。数秒もあれば届く距離にいるはずのはるかだが、胸元に抱くように両手にした炎の玉は、既にジャン・ピエールへと放たれようとしていた。流れるようなフォームから、はるかの手膝下(ひざした)に炎の玉が移動した一ツ。それはまるでボーリングの球を投げるかのようなモーションだ。膝を曲げ振りかぶった姿勢の、はるかの手投げの右手から、燃えさかる球体が掛け声と共に繰りだされた一ツ！！

「フェニックス・ロンド(不死鳥火炎輪舞)!!!」

燃えたつ火の玉が、猛烈(もうれつ)なスピードで空を切り裂く。その摩擦熱(まさつねつ)で火の玉は光弾(こうだん)となった一ツ。

「なっ、何ィ一ツ!?!」

そのまばゆさに目が眩(くら)んだジャン・ピエール。光弾はどんどん加速し、立ちつくすジャン・ピエールの囲りを、まるで生きているかのように縫(ぬ)いだした一ツ!!

ギャー一x10!?

炎の光弾が点在(てんざい)する妖怪達に次々とヒットし、焼き払ってゆく一ツ。そして、やっと視力を取り戻したジャン・ピエールが顔をあげると、目の前には妖怪達を焼き払った火炎光弾が、最後の獲物(えもの)を狩(か)らんと間近に迫っていた一ツ。

「グギャー一ツx△☆!?!」

かわす猶予(ゆうよ)などなく、ジャン・ピエールに直撃した火炎弾は、そこでバーストを起こし、ジャン・ピエールを焼き焦がし消滅した一ツ。十一本の火柱が立ち燃え上がった一ツ。

「ストライク!!!」

ボーリングに見立てた台詞なのだろうか?よく分からないが、とにかくはるかは戦いに勝利したようだ。沙織と、はるか達を覆っていた漆黑(しっこく)の異空間は消え失せ、ほのかに電灯の灯りが届いていた元の夜道となっていた。

「沙織、大丈夫?」

「え?あっ...うん。」

「良かった。」

予想だにしない出来事に、困惑(こんわく)している様子の沙織。妖怪達の残骸(ざんがい)は灰となり、風に消えてしまっていたが、ジャン・ピエールだけは、消し炭(ずみ)のようになりながらもそこに止まっていて、それが、さっきまでの出来事が夢や幻ではない事を物語っている。

「はるか...あれ...何なのお?」

「ゴメン。巻き込んだじゃって...」

我を取り戻した沙織が、話を切り出そうとするのを遮(さえぎ)るように、はるかが謝った。悲しそうなはるか。いつもなら、それ以上は何も言えない沙織だが、今度ばかりはそうは出来なかった。

「はるか。あれは一体...。」

「.....。」

「ねえ答えて!!」

「何から言えばいいのか...。」

「あの黒魔術師が言っていた事はホントなの？」

「言っていたコトって？」

「...暗殺拳とかって...。」

「違うわ。フェニックス心拳は決して暗殺拳なんかじゃない。」

「じゃあ...。」

「そこからは儂(わし)が答えよう。」

「誰!？」

どこかで聞いた覚えのある声だが、沙織はどうしても思い出せず、思わずそう叫んでいた。

「.....!? 師匠。」

「えっ？」

「フオフオフオ。」

薄闇からおぼろげに見えだしたシルエット。そこから、徳島の名峰(めいほう)眉山(びざん)を小さく模(も)したかのような毛の塊(かたまり)が、左右対象に浮かび上がった。

「師匠って、まさか。」

「久しぶりじゃのお、沙織ちゃん。」

左右対象に宙に浮いていたのは、眉山ではなく整えられた眉毛(まゆげ)であった。この立派な眉を持つ老人こそ、はるかの養父でもあり、フェニックス心拳の師匠(ししょう)でもある鮎吉(でんきち)であった。

「おじいさん!？」

「驚いたかな？」

「いえっ...はい。」

「フェニックス心拳の事が訊(き)きたいのじゃろう？」

「はい。」

「よかろう。宇宙はビッグバンという大爆発から出来た。それは学校で習ったじゃろ？」

「ええ。でもそれが関係あるんですかあ？」

「物事は順を追って説明せねば分からんからのお。まあ、聞きなされ。大爆発から炎が生まれた、そしてその炎が星や生命を作り出し、人間が生まれた。ここまでは分かるかな？」

「はあ、何となくう。」

「この宇宙のすべては、炎から生まれたと言っても過言(かごん)ではない。そして、それは今もなお種火となって、あらゆる生命の中に残っている。それゆえ、生きとし生ける者が生きていられるのじゃ。」

「それがフェニックス心拳なんですかあ？」

「まあ、そう慌てなされるな。まだ説明の途中じゃよ。」

「はあい・・・」

「炎から生まれた宇宙。宇宙から生まれた人間。炎が炎を繋(つな)いでいく過程の中に、人間が活着ているのなら、人間自体からも炎を生み出せるとは思わんかね？」

「えっ？」

「それがフェニックス(不死鳥)心拳じゃ。」

「でも・・・どうやって？」

「聖書に、神様はどうやって宇宙を作ったと書いてあると思うかの？」

「...知りませえん。」

「“光あれ”と言われたのじゃよ。」

「そうなんですかあ？」

「そうなんじゃ。それは言葉じゃろ。」

「ええ。」

「言葉が神の持つ力を開放し、形にしたのじゃ。フェニックス心拳も同じ。自分の内に潜む力を、言葉によって物質にしたのじゃ。」

「あのボールのような火の玉が...」

「人間の持つ炎。メキド（内力）と言われる力じゃ。」

「何でボールみたいな形をして動くんですかあ？」

「地球も丸い。原子も分子も丸い。最小の物から最大の物まで、炎が球形となる事によって物質を構成しているからじゃよ。球形は、命や物質の構成・運動などの素となっているのじゃ。」

「何故それをはるかが・・・あのフランス人が言ってた魔王とか秘宝って、いったいどういう事なんですかあ？」

「“ソロモンの秘宝(ひほう)”。それは、無限なる神の力を授かる事のできる至宝(しほう)。それを護(まも)るのが、はるかに与えられた使命なのじゃ。」

「そんな...」

「今日は災難(さいなん)じゃったな。もう安全じゃから、細かい話はまた今度にして、ひとまず休みなされ。」

「なんか疲れたあ～・・・」

鮎吉の言葉に安心したのか、はたまた催眠術(さいみんじゆつ)にでもかかったのか、精神的に憔悴(しょうすい)していた沙織は崩れるように意識を失った。

「無理もなかりょう・・・これだけ大変な目に遭ったのじゃからな。」

「沙織・・・」

「ところで、はるか。」

「はい。」

「初陣(ういじん)にしては良くやったな。じゃが、真のフェニックス心拳には程遠いぞよ。修行をおこたるな。」

「はい。」

「内功と精神集中、そして言葉が一致してこそ、より大きな力(メキド)を得られる。その意味を絶えず考えていなさい。」

「はい。」

「それと、その男を治療してやりなさい。」

鮎吉がそう言うと、はるか(うなづ)きは頷(うなづ)き、ジャン・ピエールに手を指しのべた。ぼうっとほのかな光が手から生まれると、ジャン・ピエールが意識を取り戻した。

「ぐっ...何故、助ける？」

「勝負は着いたわ。」

「...甘いな。体が回復したら、次は俺様が勝つ。」

「いいわ。また相手になってあげる。」

潔(いさぎよ)いははるかの言葉に一

「...あのペタングみたいに投げた火の玉。あれには勝てん。オレ様の...オレ様の負けだ。

ぐっ・・・」

情をほだされたのであろうか、ジャン・ピエールはそう言ってすんなりと負けを認めた。

「まだあんまり喋(しゃべ)っちゃダメよ。」

「...だが俺様に勝ったくらいで、いい気になるなよ。」

「どういう事？」

「いくらお前が強くて、その程度ではあのお方には遠く及ばぬわ。」

「あのお方？」

「・・・。」

意味深(いみしん)な言葉を残し、ジャン・ピエールは気を失った。

「ついにあ奴が動き出したか...」

「師匠ッ！あやつって誰なの？」

「世界征服を目論(もくろ)む闇の組織、ダークエンジェルズじゃ。」

「ダークエンジェルズ？」

「ソロモン王の秘宝に記された神の力を悪用しようとする組織じゃ。」

「どんな人達なの？」

「闇社会を牛耳(ぎゅうじ)る、実力者達の頂点に君臨(くんりん)する組織じゃ。奴らは政府機関や経済界にも根ざし、世界にまたがっていて、その実体は攔(つか)めておらぬのじゃが。ゝ女帝、と呼ばれる者を筆頭(ひつとう)に、何人かの心拳の使い手が上層部にいるらしいという噂じゃ。」

「お兄ちゃん(秀樹)はその事...」

「知っておる。」

「...そう。心拳の使い手は強いのか？」

「沙織ちゃんと一緒に、明日、秀樹の店で話すとよかろう。」

「沙織と？」

「そうじゃ。あの子が今日の事に出会ったのも、何かの縁じゃろう。親友なのじゃから話しておかねばな。迷惑(めいわく)もかけた事じゃし、いきさつをきちんと聞かせてやるがよい。」

「...はい。」

はるかはあまり気のりしていなかったようだが、沙織には話しておいた方がいいと思ったので、鮎吉はそう言ったのであった。

運命という名の必然(ひつぜん)。因果(いんが)の法則と言おうか、結果には原因があつて、何らかの要素があるからこそ、今日のような出来事が起こった。

まだまだ未熟(みじゆく)な、はるかをサポートできる身近な存在になって欲しいという気もあつたが、それ以上に人生経験からくる勘(かん)のような物がそう告げていたのである。

しかし、その予感が、後に鮎(でん)吉(きち)の予想を超える圧倒的(あつとうてき)スケールで現実化する事になるとは、まだこの時、知る由(よし)もなかった。

バトルボーラーはるか
第一集
バトルボール(神気珠玉)
三章
フェニックス(不死鳥)心拳

<http://p.booklog.jp/book/54688>

著者：Ψ (Eternity Flame) 英樹 (はなぶさいつき)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile>

ブログ：<http://profile.ameba.jp/jjmmd123/>

編集：Ψ (Eternity Flame) 秋乃空 (あきのそら)

ブログ：<http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/>

感想はこちらのコメントか秋乃空のブログへお願いします。

<http://p.booklog.jp/book/54688>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/54688>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ